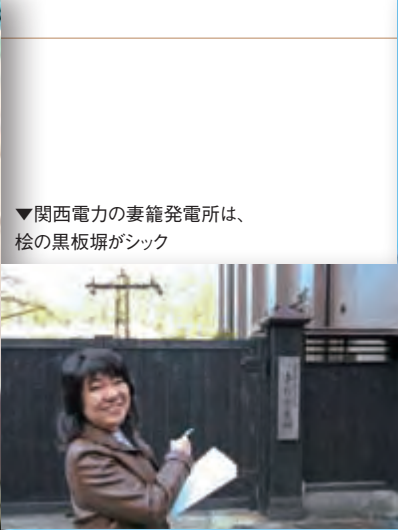


長野県南木曽町「桃介橋」にて

「木曽路はすべて山の中である」
そう書いたのは島崎藤村。『夜明け前』の
冒頭文だ。木曽に生まれた彼の言葉どおり、
豊かな水量の木曽川に沿って、連なる山の底
を這うように木曽路は続いていた。
冬の気配を漂わせた山あいの町は、初めて
訪れた場所だったのに、不思議と懐かしさを
感じた。作物を収穫したあとの茶色い田畑、
農家の軒先に吊り下げられた柿の実、色褪せ
た葉をわずかに残した木々。都会で生まれ育
った私に、古里の記憶はない。それなのに、
郷愁を感じるのは、なぜだろう？

大正モダンの電源開発、

木曽川水系を行く



長野から木曽谷を下り、濃尾平野を蛇行して伊勢湾に注ぐ木曽川。大正期に大同電力（現・関西電力）を設立し、電力王と呼ばれた福沢桃介（1868-1938）は、「一河川一会社」（1つの水系の発電施設は1つの会社が一貫して建設・運用してこそ理想的な水力利用ができる）を唱えて木曽川水系を開発。現在、木曽川水系には32の発電所がある。と「木曽川電力資料館」で関西電力木曽電力システムセンターの早川雅人さん（写真上）が教えてくれた。



▲木曽路を経由して江戸と京を結んだ中山道の「妻籠宿（つまごじゅく）」



▶ 浦島太郎伝説が残る「寝覚の床」。子供の頃はここで遊んだという、関西電力東海支社の洞田弘美さん（写真上）に案内してもらった



日本人の原風景

木曽八景の一つに、「寝覚の床」と呼ばれる景勝地がある。木曽川の激流に、花崗岩が侵食されてできた自然の彫刻で、白い巨大な奇岩の数々が深緑色の水に映えて、美しい光景だった。JR特急「しなの」の車内アナウンスでも紹介された。それによると、浦島太郎伝説の終着点と言える場所のようだ。

浦島太郎は竜宮城から戻ってくるが、実は長い年月が経っており、知人も亡くなっていた。傷心の彼は旅に出て、木曽川の美しい風景に辿り着く。そこで彼は、乙姫から貰った玉手箱を開ける。結末は……よく知られた民話どおり。彼は今までのことが夢で、この地で目が覚めたかのように思った。このことから、この場所が「寝覚めの床」と名づけられた、という話である。この伝説によると、彼はどうやら木曽の地で余生を送ったようだ。

漁師の浦島太郎は、海の町の生まれ育ちだろう。それなのに、なぜ木曽の山里を選んだのだろうか。場所があまりにも美しかったから？ 激しい水流と奇岩が、海を思い出させたから？ それもあるだろうが、彼もまた、初めて見るこの地に、懐かしさを感じたのではないだろうか。木曽川沿いの町は、日本人の原風景とも言える風情を携えている。

電力王・福沢桃介

その木曽川の激流を止め、発電所建設に道を切り開いた男がいる。大正時代に本格的ダム式発電所を日本で初めて造り、のちに「電力王」と呼ばれた福沢桃介だ。彼の建設した発電所の数々、大正時代の景観を残すダム、未来への夢を架けた橋へと、木曽の地を訪ねた。私の旅は、過去のお伽話から、近代のドラマチックなサクセス・ストーリーへと続いていった。

その姓から連想されるとおり、福沢桃介は福沢諭吉の娘婿だった。幼い頃から神童と言われた彼は、諭吉の目に留まり、養子縁組を持ちかけられる。承諾の条件として、米国留学をあげたらしい。若い頃の彼の写真は、利発そうで、なかなかのハンサムだ。その目は、はるか遠くを見つめている。

米国留学は、桃介に大きな影響を与えたのだろう。事業の方法だけでなく、近代的な建物を数多く見て、美意識を培ったに違いない。彼は木曽川に大正八（一九一九）年から十五（一九二六）年にかけて、賤母、大桑、須原、桃山、読書、大井、落合の順で、七つの水力発電所を建設しているが、どれも個性的でロマンに溢れている。

桃介の開拓者精神

桃介の時代——今から百年近く前、近代化の途上にあった日本において、電気事業はチャレンジ精神をかき



桃山発電所竣工の1カ月後、1923年12月に竣工した読書発電所（写真上）。完成時の出力は40,700kWと、当時としては記録的な大容量だったという（現在117,100kW）。読書の名は、明治初頭に「与川」「三留野」「柿其」の三村が合併したとき、頭文字をつないだ村名「読書村」（現・南木曾町）に由来しているそうで、本館は鉄筋コンクリート造りのレンガ壁、半円形の飾り窓がモダン。



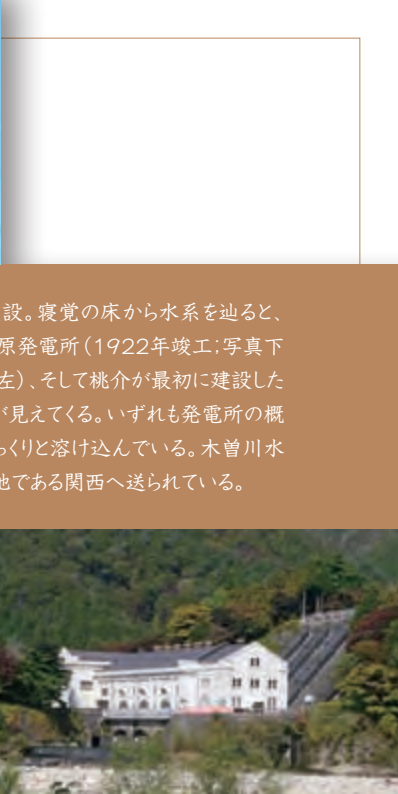
▲読書（よみかき）ダム



▲落合発電所（1926年竣工）



▲大桑発電所



▲賤母（しずも）発電所

立てるものだった。日本で電気が一般的に使われ始めたのは明治二十年代で、この頃は小さな火力発電所しかなく、停電も頻繁に起きていた。日本の経済力が増すにつれ、大量の電気をより安く、停電することなく使いたい、という要求は強くなっていく。

それに応えようとしたのが、桃介だ。彼は自ら中央アルプスの奥地に入り、調査を重ね、木曾川の豊かな流れが、日本の電力の供給に新しい未来をもたらすと考える。そして、水力発電所の建設に着手するのだ。

彼が造った七つの発電所の中でも、建設に困難を極めたのは大井発電所だった。工事期間中に何度も洪水が襲う、関東大震災により資金が行き詰まる。建設断念かとも言われたが、桃介は海外に資金調達に向いて、この苦難を乗り越えた。日本初の本格的ダム式発電所を完成させたのだ。

木曾川水系で生み出された電気は、これもまた桃介によって造られた延長二〇〇キロ以上に及ぶ送電線で関西に送られ、日本の近代化に大いに貢献することになる。

遊び心とこだわりの意匠

風光明媚な木曾川に発電所を築く時、桃介は周囲の景観に、ずいぶんと配慮したようだ。それぞれの発電所は、外観意匠を巧みに変えている。美しい自然を見るのも好きだが、私は人間が創造したものを見るのが大好きだ。そこには、夢と希望と、知恵と努力が表れている。長い

年月を経ても、強い意志は色褪せていない。

寢覚の床から川沿いを下ると、まず見えてくるのが桃山発電所だった。白い四角い建物は、中世ヨーロッパの小さな城塞のように見える。建物に引き込まれた黒い鉄管がなければ、ここで電力を生み出しているとは、わからないだろう。最初の出会いで、発電所という概念を覆されてしまった。

その下流にあるのが須原発電所。こちらも白い洋館風だが、波模様のある切り立った屋根の上に、小さな塔が見えた。まるで西洋の寄宿学校のような。聞くと換気口とのことだったが、実用性だけを考えるなら、わざわざ塔の形にすることもない。桃介の遊び心、デザインへのこだわりが表れている。

さらに下流に向かうと大桑発電所が見えてくる。こちら是对照的な赤い煉瓦造りで、モダンな女学校という雰囲気だろうか。思わず、可愛い、と女子高生みたいな声をあげたくなる。

現役の近代化遺産

そして、近代化遺産として発電設備で初めて国の重要文化財に指定された読書発電所。白い建物は外壁の上辺に凝った装飾がされ、半円形の窓や屋上に突き出た明り取り窓が、アールデコ洋式を感じさせる。小さなホテルといった趣だ。

発電所内部は、外観の装飾とは対照的に、現代的に



柿其水路橋(写真右)。読書発電所への導水路のうち、柿其川を渡る全長142.4mの鉄筋コンクリート造りの水路橋。1994年、読書発電所本館(写真上)と水槽・水圧鉄管(写真左)、柿其水路橋と、南木曾町所有の桃介橋(写真下)が、近代化遺産として国の重要文化財に指定された。これは発電設備として、また今なお稼働している設備としても初の快挙だという。

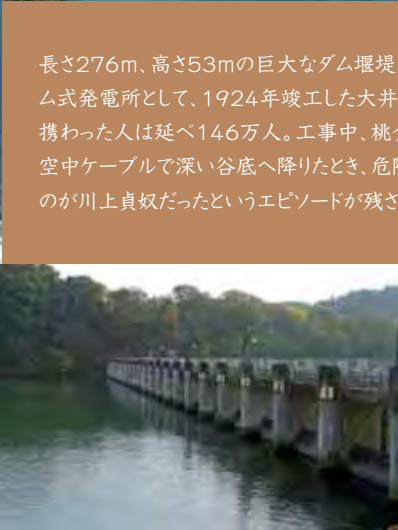


なっていた。木曾川の水力発電所は、今はすべて無人で、名古屋で制御されている。機器の異常の知らせが入ると、設備を保守する人が出勤することになっている。点検のための分解工具の大きさや多さに、ちょっと驚かされる。完成当時に最大級の出力を生み出していた発電所は、現在も大切な電気を私たちに供給し続けてくれている。

読書発電所に水を引き込むための柿其水路橋も、重要文化財に指定されている。二連のアーチと多数の支柱で支えられ溪谷を横断する橋は、現存する戦前の水路橋では最大級の規模だ。人力に頼っていた大正時代に、山中にこういった建物を造るのは、どれだけ大変だったろう。水路には滔々と水が流れ、今でも現役で活躍している。

読書発電所の建設資材運搬のために、木曾川に架けたのが桃介橋だった。長さ二四七メートルの木製の吊り橋は、遠くから見るとダイナミックで、そばで見ると頑強で優美である。三基あるコンクリートの主塔の二重アーチが凝っていて、大正モダンを感じさせる。実用本位だけでなく、木曾川の景観に調和している。この橋自体は、付近の公園の整備と合わせて、近代化遺産として修復・復元されたものだそう。渡る人は多く、今でも住民の大切な通路になっていた。橋板には資材運搬用トラックのレール痕がところどころ残されていて、当時の大仕事を思い起こさせる。

苦難の末に完成させた大井発電所も、そばの大井ダムの堰堤が生活路になっていた。大正十三(一九二四)年という時に、深い溪谷に、この巨大なダムが造られたこ



長さ276m、高さ53mの巨大なダム堰堤を持ち、日本初の本格的ダム式発電所として、1924年竣工した大井発電所（写真上）。工事に携わった人は延べ146万人。工事中、桃介が作業員を激励しようと、空中ケーブルで深い谷底へ降りたとき、危険を顧みず行動をとにしたのが川上貞奴だったというエピソードが残されている。

普明照世間

とは驚異的だ。その苦労は想像の中にしかない。通路は手摺りの装飾が美しく、吊り下げられた外灯にも、大正ロマンの風情が残っている。桃介もここを歩いたのだろうか。豊かに水をたたえたダム湖は、恵那峡という名勝地を造り出した。自然と人間が協力して生み出した美しい風景だ。

福沢桃介がこの数々の大事業を成し遂げた時、彼のそばには、事業パートナーとして、日本初の女優としても活躍した川上貞奴がいた。当時の二人の様子を垣間見ることができなのが、桃介橋近くの福沢桃介記念館と、名古屋市にある二葉館だ。

福沢桃介記念館は、発電所建設現場に通う別荘として建てられたもので、お洒落な洋風建築だが、電力王の別荘にしてはやや小ぶりに思えた。豪奢と言うよりは、しっかりと落ち着いた感じがある。だが、中に入ってみると意外に広い。当時の調度や遺品が展示されていて、興味深い。庭は、秋は貞奴が好きな紅葉で彩られ、春は桃介がドイツから輸入したという一本の木に三色の花を咲かせる桃が、咲き乱れるそうである。

対して名古屋の二葉館は、オレンジ色の屋根が目立ち、大きくて豪華な造りの建物だ。大広間は美しいステンドグラスで飾られ、電気の灯りを効果的に配している。こちらは華やかな社交場だったのだろう。人々を招いて、



柿其水路橋の上に登ると、足元の水路が水が滔々と流れているのが見える

編集後記

二〇一〇年代の幕が開きます。

百年に一度と言われる世界的な経済危機からの回復は未だ見えてはきませんが、中国をはじめとする新興国の台頭など、世界の潮流は確実に変わりつつあるようです。こうしたなかで日本はどう動けばいいか——伊藤元重さん、山家公雄さん、村田晃嗣さんにお集まりいただいた鼎談では、二〇一〇年代の日本の進路」を語り合っていました。

鼎談でも動向が注目されたのが、躍進著しい中国でありアジアの国々。関西とアジアは、歴史的にも現在も深いつながりがあります。関西に暮らす中国人、観光客や留学生として訪れるアジアの人々とそれを受け入れる関西の人。「ルポ」では、そんな元氣なアジアとの交流の今を探りました。

一方、百年近く前、電気事業は「新興」のビジネス。起業家精神溢れる人々が競って参入していた時代がありました。「エコルーツ紀行」では、大正期、木曾川水系の電源開発に挑んだ「電力王」の足跡を、黒崎緑さんと辿り、当時の発電所が今も現役で働いているさまを見できました。

変えるもの、変えないもの——困難な時代にも躍進を目指したベンチャーたちに学び、「躍」も二〇一〇年、もう一段の飛躍を目指したいと思います。

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社取締役社長)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 地域共生・広報室
 発行人／八嶋康博 編集人／横山実果
 〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
 企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ピー



黒崎 緑 くろさき みどり

1958年兵庫県生まれ。同志社大学文学部卒。大学で推理小説研究会に所属。89年『ワイングラスは殺意に満ちて』でサントリーミステリー大賞・読者賞受賞(95年テレビドラマ化)。他の著書『聖なる死の塔』『闇の操人形』『棺の花嫁・聖なる血の城』『揺歌』『しゃべくり探偵』『死人にグチなし』『未熟の獣』など。09年4月にはケータイ小説と連動したNHKドラマ「探偵Xからの挑戦状」の原作も手がける。

<http://homepage1.nifty.com/chameleon/kuro/>

撮影／山内厚美

自らの事業、電気の素晴らしさをPRしたそうで、記録によれば庭には電気じかけの噴水やサーチライトまであったとか。当時の桃介の勢いと、貞奴の華麗さが表れているようだ。ただ、二階には和室があり、仕事を離れたくつろぎの場所だったのかもしれない。絢爛と簡素が同居している。建物はその調和で成り立っていた。

「普明照世間(ふみょうせ間を照らす)——大井発電所にある碑に書かれた言葉で、観音経の詞句だ。意味は「あまねく世間を明るく照らす」。福沢桃介が選んだ句だとか。

電力が不足していた大正の時代に、安定した供給をし、世の中を明るく照らそうとした男がいた。その志は、今でも形として残って、純国産のエネルギー供給源として、未来へと受け継がれている。 **躍**